

日本出土の百済・新羅緑釉

はじめに

日本古代の奈良三彩、緑釉など「鉛釉陶器」と総称される施釉土器の製作は、中国や、朝鮮半島の技術系譜によるものであることは通説的な理解になっている。

日本では、ごく少数ではあるが、中国や朝鮮半島の製品そのものも出土している。ここであつかう日本出土の朝鮮半島製とみられる緑釉土器（以下「緑釉」と略する）は、最近の代表的な図録（『日本の三彩と緑釉』1998年²⁾）所載の集成では16例で、ほとんどが近畿地方に分布しており、その年代は、すべて「統一新羅」とされている。ここでは、この集成をもとに、主として7世紀代の緑釉の産地、年代、日本での緑釉製作の開始など、いくつかの問題を考えてみたい³⁾。

新羅の緑釉

豊浦寺の緑釉壺（図41） 1985年に豊浦寺（奈良県明日香村）講堂跡雨落溝（奈良時代以降）などから出土した長頸壺体部とみられる破片である。沈線のあいだに、スタンプによる水滴形文と円弧文を交互に配する。円弧文は、半円形で点をもつ⁴⁾。黄灰色の胎土で、やや軟質の焼成の土器である。外面および内面の一部に薄い緑釉がかかる。宮川禎一氏による「1b式」で、制作年代は7世紀前半から中頃という位置づけになる。したがってこの土器の年代は「統一新羅」ではなく、「古新羅」時代となる。日本で出土している新羅緑釉としては年代的にもっとも遡る例である。

三ツ池遺跡の緑釉壺（図42） 2001年に奈良県平群町で出土した。溝から8世紀前半の土器をともなって出土したものである。長頸壺の体部とみられる。体部上半に横方向の沈線の間にスタンプによる水滴形文と円弧文を配する。円弧文は、二重の半円形である。胎土は灰白色で、砂粒を含み軟質の焼成である。外面に厚い緑釉をほどこし、内面にも部分的に緑釉がみとめられる。本例も宮川氏の分類では1b式で、制作年代は7世紀前半から中頃となる。

先の豊浦寺例と比較すると、本例は同様の文様構成ではあるけれども、円弧文には点がなく、かつ弧線が二重になっており、新しい様相を示し、両者の間に時期差が

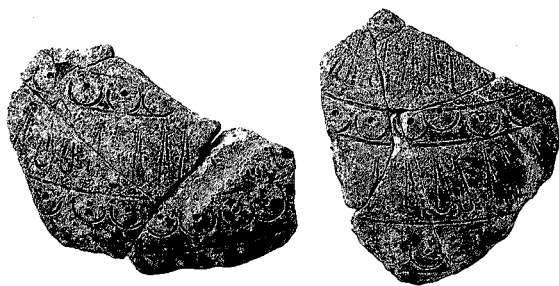


図41 豊浦寺の新羅緑釉

あることを示唆する。豊浦寺例も、三ツ池遺跡例も現状では、製作から廃棄に至るまでに長期にわたる伝世を想定せざるを得ない。

百済緑釉の存在

1986年に藤原京左京六条三坊（奈良県橿原市）から出土した獣脚をもつ緑釉陶硯の産地について、先にあげた図録にみられるように、「統一新羅」とする見解がなお一般的である。私は先に百済製の可能性を指摘した⁷⁾。これに関連して問題にしたいのが、アカハゲ古墳（大阪府河南町）出土の「黄褐釉」の陶硯である⁸⁾。

アカハゲ古墳の緑釉獣脚硯 これも「統一新羅」とされてきたものである。蓋、肩、脚の各部分が採集されている。まず、獣脚をなす脚部に注目する。末広がりの脚の下半分には三角文があり、脚中位には二条の隆線もあるようである。蓋には沈線および、小円文を配する。脚の形態、文様の点で、百済獣脚硯との類似を指摘できるので、これも百済産の陶硯である可能性を考えてみたい。さらに、この硯とセットの蓋の形態や文様を媒介にすると、他の「統一新羅」陶硯蓋とされてきた緑釉の産地に関しても有力な手がかりを与えるのではないかと。すなわち、従来「統一新羅」硯蓋とされてきた久世廃寺（京都府城陽市）の緑釉、大坂城三の丸遺跡（大阪府大阪市）の緑釉、の2例についても、ともに円文をもつなどの共通点があるので百済産と推測できよう¹¹⁾。文房具に百済製品が目立つことは注目に値する。

新羅緑釉と新羅陶質土器

新羅陶質土器にたいして新羅緑釉の占める割合はどうか。飛鳥藤原地域の7世紀代の「新羅印花文土器」の集成では、全17例のうち緑釉製品はわずか2例（豊浦寺および大官大寺下層出土例）で、ほかはすべて陶質土器である¹²⁾。

8世紀に降って平城宮・京城でも同様の傾向を示す。平城宮、京全体を通じて新羅土器は5例報告されており、そのうち緑釉は平城宮東院出土の壺1例のみにとどまる¹³⁾。



図42 三ツ池遺跡の新羅緑釉（平群町教育委員会撮影）

このように、緑釉の出土分布は、きわめて限定されたあり方を示している。

日本における緑釉施釉の開始

日本における緑釉施釉製品の出現にかかわる資料としては、これまで塚廻古墳（大阪府河南町）の棺台、川原寺（奈良県明日香村）の緑釉磚がとりあげられてきている。

塚廻古墳の棺台 塚廻古墳の棺台は、土製で、長方形の浅い箱状（復元寸法：長さ約1.9m、幅約0.72m、高さ約0.21m）を呈し、下面をのぞく全面に緑釉をかける。緑釉は、内壁の下方に、濃緑色の溜まりがみられるものの、釉は総体にごく薄い¹⁵⁾。塚廻古墳の年代観が、直接日本における緑釉施釉の開始年代をめぐる問題を左右することになるけれども、7世紀中頃から後半にかけての諸説があり決着をみていない。

川原寺の緑釉磚 緑釉の水波文磚は川原寺の創建時のものと仮定した場合に日本における緑釉施釉開始年代をさぐる有力な資料になり得る。川原寺では半肉彫りと線彫りの2種がある。緑釉の水波文磚は、最近の興福寺中金堂の発掘でも出土しており、創建時、8世紀初頭の製品とみられる。興福寺中金堂例は、半肉彫りに限られるので、川原寺の緑釉磚の年代については興福寺例も含めた検討を要する。

飛鳥池遺跡のガラス生産関係遺物

近年、飛鳥池遺跡（奈良県明日香村）において、ガラスルツボとともに方鉛鉱、石英などが出土し、原料からのガラス生産がおこなわれていたことが知られた。この場合のガラスは鉛ガラスであり、本稿であつかっている緑釉も鉛を原料とする鉛釉と総称される釉薬であり、両者は技術的には共通する。このガラス生産は「藤原官期」であり、先の塚廻古墳棺台との関連に関心がもたれるが、年代的な関係が流動的である。今後の研究の進展に期待し

たい。

おわりに

本稿であつかった百済・新羅緑釉に関しては日本への搬入の歴史的背景が何であったかに関心がもたれる。その追求には、確実な事実認識にもとづいた議論がもたれよう。ここではそのための基礎的な作業の一端を述べた。

（謝辞）三ツ池遺跡出土の緑釉の実見について村社仁史氏のお世話になった。謝意を表する。

（千田剛道）

- 1) 巽淳一郎『陶磁（原始・古代）』（日本の美術235）1985
- 2) 『日本の三彩と緑釉－天平に咲いた華－』（開館20周年記念特別企画展図録）愛知県陶磁資料館1998
- 3) 本稿は、1998年11月の第10回東アジア考古学・古代史合同研究会での「予察：東アジアの三彩・緑釉－日本出土の中国・朝鮮半島製品をめぐる－」と題する口頭発表の内容を含んでいる。
- 4) 『藤原概報16』奈文研1986および安田龍太郎「飛鳥藤原地域出土の新羅印花文土器」『文化財論叢Ⅲ』2002
- 5) 以下、新羅土器の文様名、型式編年などは宮川禎一「文様から見た新羅印花文陶器の変遷」『歴史学と考古学』、宮川禎一「新羅陶質土器研究の一視点－7世紀代を中心として－」『古代文化』40-6 1988、に依る。
- 6) 村社仁史「平群町三ツ池遺跡出土の緑釉印花文陶器」『陶説』584号2001、調査担当者は、遺跡の性格について、『続日本紀』和銅5年（712）の高安城への元明天皇の行幸記事などから行宮的な施設との関連を想定している。
- 7) 千田剛道「獣脚硯にみる百済・新羅と日本」『文化財論叢Ⅱ』1995
- 8) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1981『飛鳥時代の古墳』
- 9) 城陽市教育委員会1981『城陽市埋蔵文化財調査報告書10』
- 10) (財)大阪文化財センター1992『大坂城跡発掘調査概要3』
- 11) この2例について、白井克也「日本出土の朝鮮産土器・陶器－新石器時代から統一新羅時代まで－」『日本出土の舶載陶器－朝鮮・渤海・ベトナム・タイ・イスラム－』東京国立博物館2000でも、百済系統か、と述べている。
- 12) 前掲註4 安田論文
- 13) 千田剛道「平城京の唐・統一新羅陶器」『MUSEUM』461号1989、なお法隆寺（奈良県斑鳩町）からは、8世紀代とみられる新羅緑釉陶硯が出土している（前掲註7参照）。
- 14) 前掲註1
- 15) 北野耕平「河内飛鳥の終末期古墳」『二上山麓の終末期古墳と古代寺院－平野古墳群と尼寺廃寺－』2002
- 16) 広瀬和雄「横口式石槨の編年と系譜」『考古学雑誌』80-4 1995では、660～680年頃とする。
- 17) 田中琢「鉛釉陶の生産と官営工房」『日本の三彩と緑釉』1974
- 18) 『興福寺－第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ－』興福寺1999
- 19) 『藤原概報22』奈文研1992
- 20) 肥塚保隆「ガラスの調査研究」『美術を科学する』（田中琢編）日本の美術400 1999